

目次

シングルマザーとしての「はじまり」／女性の貧困元年／社会の子ども

第一章 子育ての後に、待っていたもの

水野敦子 なぜに、私が多重債務者に……

進学とともに暗転した生活／母子家庭の子どもは大学へ行くな／家計崩壊／

人生の「落伍者」となった日

川口有紗 子どもを育てていただけなのに……

モラルハラスメント／新たな一步を踏み出す／父親との面会交流／

必死に働いてきた母親が見捨てられる

渡辺照子 シングルマザーという、当事者性を武器に

新生児を抱えて野宿の日々／最低ランクの母子家庭／重度のうつ／

派遣労働に異議を唱える

第二章 一九八五年

——女性の貧困元年

男女雇用機会均等法／私の一九八五年／男女雇用機会均等法の陰で／
夫に扶養される妻への優遇策／男女雇用機会均等法と労働者派遣法／
児童扶養手当の減額／遺族年金の創設／私の一九八六年

インタビュー — 一九八〇年代以降の無策がシングルマザーを苦しめている

宮本みち子（千葉大学・放送大学名誉教授）

105

二大潮流のせめぎ合い／女性の分断／女性の社会進出は、非正規労働者として／
八〇年代の「幻想」のツケが今

第三章 老後などない

森田葉子 貧困の連鎖は断ちきったけれど

夫に抱いた嫌悪感／クレジットカードの罨／貧困の連鎖を断ちきる／
ウルトラCの奇跡／身体だけが資本

119

75

大野真希 セックスワーカーとして生きる

連夜の宴会と暴力／キャバクラで綱渡りの生活／本番行為／

超難関校進学と一〇〇〇万円の貯金／抗えないコロナ禍

小林尚美 子育てにもっと、「手」があつたなら

自分は悪くないんだ／調停マニアと化した夫／発達障害／ネット依存／

働け、自立しろ

インタビュー 福祉は恵んであげるもの、という誤解

神原文子（社会学者）

181

雇用の流動化／働いても生活できない賃金体系／

どうすれば、貧困に陥らなくて済むのか／養育費の取り立て制度を／

改悪され続けた、児童扶養手当／離婚はわがまま／この国の子ども観／

子育てを終えた、シングルマザーの未来

第四章 世界はシングルマザーをどう見ているのか

——フランスと韓国の場合

フランス

〈社会の子ども〉という考え方／女性の社会的地位の高さ／
養育費立て替え制度の重要性／福祉に「自立」は存在しない／
教育にお金がかからない／自分の人生を楽しむための支援／
親へのソーシャルワーク

韓国

ひとり親家族の日／当事者が明るく、元気になる支援／未婚母への手厚い支援／
養育費問題／起業支援を柱とする、就労支援

インタビュアー 日本のシングルマザーはなぜ、ワーキングプア状態に陥るのか

247

畠山勝太（比較教育行財政／国際教育開発専門）

先進国で最低、日本の女子教育／突出する、日本の子どもの貧困率／
なぜ日本のシングルマザーは貧困なのか／足を引っ張る、日本特有の労働慣行／

207

奨学金の拡充を／今の子育てに特有の問題とは

おわりに

コロナ禍を生きる／コロナ後、目指すべき社会とは

参考文献

はじめに

この世界のどこにも、自分が繋が^{つな}がっているという感覚がない。足元は雲のようにふわふわで実体はなく、手を伸ばしても虚^{むな}しく空を掴^{つか}むだけ。虚空にたった一人、苦しさで胸をかきむしりながら、のたうち回る。

このような経験を、あなたはしたことがあるだろうか。

二十数年も経^たち、正直、あの名づけようがない時間を正確に表現できるか心許^{こころもと}ないが、たとえ一端であっても、言葉にしてみようと今、初めて思っている。それは、私だけの経験ではないと思うから。きつとどこか、似たような苦しみや傷を持つであろう、あなたに向けて、私自身のシングルマザーとしての「はじまり」を話したい。

シングルマザーとしての「はじまり」

事実婚だった夫に、恋人がいることが発覚した翌日のこと。一度目のお泊まりで、私は直観した。本人からその事実が告げられたとき、一瞬にして、自分の尊厳といったものがだるま落としのように蹴り倒され、私は何の価値もないほろ雑巾なのだと思った。

それはかつて、体験したことのない感覚だった。この世界のどこかに、もたれかかることも、寄りかかることも、踏みしめることも、立つことも、何もできない。世界と繋がるフックを、私はすべて失った。軸を失ったコマのように無軌道に感情が揺れ、苦しみに押しつぶされそうな心の底からふりしぼるように「助けて」と念じても、思いはどこにも届かない。

世界からこぼれ落ちてしまったという感覚、それは恐怖以外の何ものでもない。

ふと思う。これが、「狂う」ということなのか。

じっとしていることに耐えきれず、衝動的に電車に飛び乗った。どこをどうやって帰ってきたのか、最寄り駅の改札を出て歩き出した瞬間、一つだけ、世界との繋がりが戻って

きた。

子どもだった。一二歳と四歳の二人の息子。

「ああ、私には二人の子どもがいるじゃないか。無条件に、私を愛してくれる存在が……」

そう思えた途端、冷えきった身体からだに、あたたかな血液がじんわりと流れ出した。

そうか、私は子どもの手すら放してしまっていたのだと、そのとき、初めて気がついた。私は何をやっていたのだろう。最も放してはいけない存在を、たとえ数時間であっても、ないものにしていたなんて……。

子どもという媒介を得て、世界とcaろうじて繋がった感覚を取り戻したものの、ぼろ雑巾であることも裏切られた事実も変わらない。長男が小学六年生、次男が保育園年中の夏、私の精神は軋きしみ出した。

P T A役員だったため、会費を徴収するのだが、八軒ほど回った後に訪ねた、前役員に言われた。

「なんで、この金額なの？ 全然、違うよ」

言われるがまま、再徴収に動いた。何で？と言われても、理由などわからない。銀行に行けば、三回は出直さないと、一つの用事が終わらない。実生活での能力が落ちた分、嘘を見抜く感覚だけは研ぎ澄まされた。瞬間、嘘がわかる。嘘をつく人は顔が醜いから。

また今日も、首都高が三時間渋滞したのだ。クライアントからもらったという、Tシャツ。そんなわけがない。小さな嘘が、ゴミ溜めのように部屋中を埋め尽くす。一分一秒ですら、じっと座っていられない。不安という刃が身も心も切り刻み、苛み続ける。

やがて、心療内科の薬を服用するようになった。抗不安薬と精神安定剤、そして睡眠導入剤。どれも必要なものだった。

夫に子どもを預けて出かけた地方取材は、インタビューの前に精神安定剤をガリガリ噛んで臨むというものだった。そうじゃないと、溢れる感情や涙を制御する自信がなかった。満身創痍の情けない取材だったが、よく書けたと思う。ライターの仕事に支障をきたすこととはなかったと思っっているが、実際はどうだったのだろう。

原因は自分にもあったのだと思ひ、やり直そうと努力もしたが、「首都高が三時間渋滞」などと繰り返される嘘に耐えきれず、別居を決め、その流れのまま別れることとなった。

当人同士の話し合いでは埒が明かず、二〇万円を払い、弁護士を立てた。弁護士のおかげで話し合いがスムーズに進み、子ども一人につき月五万円、計一〇万円の養育費を、二人が社会人になるまで支払うという合意を得た。長男は私の連れ子で彼との血縁はないが、二人の息子に「差」をつけることがなかったことには感謝した。

フリーライターの収入だけでは生活が厳しいため、広告代理店で週三日のアルバイトを得た。業務は医療器具のキャッチコピーを考えるコピーライター。九時から一八時までの勤務で日給は一万。一時間強の通勤電車内で過呼吸になり、涙が止まらなくなりながらも、元夫への「憎悪」を糧に生きていた。

正直、ライターを辞め、会社員になることも考えた。しかし、先輩のルポライターから「あなたは筆を折ってはいけない」と強く説得され、思いとどまった。その後、彼女は大きな仕事を私に譲ってくれた。

弟の保育園のお迎えは兄が担い、二〇時の帰宅と同時に食事を作り、三人で食卓を囲んだ。不安定な精神状態の母親の代わりに、兄が弟を守っていたと思う。父親がいない家族

の「歴史」を新たに刻んでいこうと、夏休みには三人で旅行にも行った。

広告代理店は超過勤務を要請されたため辞めることにし、次男にチック症などのメンタルに起因する症状が現れたため、できるだけ一緒に過ごせるよう、フリーという不安定就労の道を選んだ（四〇歳という年齢で、正社員雇用される道があったかどうかは定かではない）。

子どもとの時間は戻ってこない。発達障害の傾向もある次男に、できるだけ寄り添いたいという思いからの決断だった。チックの原因に、私の不安定さがあったことは間違いない。四歳から六歳という大事な時期、母に甘えたくても母は自分のことではいっばいだった。足りなかったものを、存分に与えたかった。

生きる糧としていた「憎悪」を手放したのも、その頃だ。自分が被害者でいる限り、私自身の人生を歩めない。むしろ毎月、きちんと養育費を入れてくれることに感謝して生きていこうと決めた。

念願だったノンフィクションの仕事に辿り着くことができ、「家族内殺人」事件を立て続けに手がけるようになったのは、母子家庭になってから三年、四〇代前半のことだった。子どもの成長という喜びとともに、犬も家族に加わり、犬を中心とした三人の暮らしは

楽しく、笑いの絶えないものとなった。つくづく思った。外ではいろいろあるけど、家の中にいる限り、幸せだなーと。

振り返れば、このときはまだ二人とも義務教育期間で教育費はかからず、就学援助もあったし、何より児童扶養手当という大きな支えがあった。こうした福祉の支えがあったからこそ、穏やかな日々が可能だったのだ。

母子家庭の暮らしに暗雲が垂れ込めてきたのは、次男が都立高校の入試に失敗し、私立高校に通うようになってからだ。入学金と学費は、無利子の東京都母子福祉資金を借りることができたが、元夫が「なぜ、都立に行かせないのか!」と激怒、ここから養育費が途絶えることとなった。好きで、私立に行ったわけではない。

私立高校の高額な授業料と養育費の消失で、生活は一気に苦しくなった。世は、高校の授業料無償化以前のこと。

長男は都立高校から難関私大に合格。「国の教育ローン（教育一般貸付）」を借り入れて初年度納入金を支払い、翌年からの学費は奨学金とアルバイトで長男自身が支払った。た

だ、この時期はまだ、次男が一八歳未満だったため、児童扶養手当という支えがあった。

生活苦に喘ぐ^{あえ}ようになったのは、次男が高校を卒業し、児童扶養手当という福祉のセーフティネットが消失してからだ。次男は現役での合格は叶わなかったが、理系に進みたいと浪人の道を選び、予備校できちんと学ぶことを望んだため、「国の教育ローン」を借り入れ、その授業料に充てた。

二〇一三年に開高健ノンフィクション賞を受賞したことで、賞金を教育ローン返済の一部に充てることができたなど、ホツとした時期もあった。受賞したことで仕事の依頼は増え、忙殺されるようになったものの、ノンフィクションという仕事の、かけた時間と労力と手にする対価のあまりにもアンバランスな実態に、本を出しても苦しい日々が続くことに変わりはなかった。

ローン返済の負担も大きく、未払いの養育費を回収しようと弁護士に相談し、「養育費履行」を求める内容証明を元夫に送ることになった。算出された未払金の総額は、約三四〇万円。これがあれば、どれだけ生活への不安が解消されていたことか。もちろん、無視されて終わりだ。離婚時、二〇万円（繰り返し返すのは、この金額を払うのが当時、非常に大変だ

ったからだ)を払って頼んだ弁護士は、養育費の取り決めを公正証書にしていなかったため、取り立ての強制力は一切なかった。この事実も、この時点で知った。当時の精神的混乱で、合意文書の確認すらしていなかったのだ。

元夫は時折、息子たちと会って豪華な食事をご馳走したり、小遣いをあげたりしたことはあっても、二人の学費についてはビタ一文、支払ったことはない。

女性の貧困元年

「黒川さん、女性の貧困元年っていつだと思います?」

二〇一七年夏、大阪・梅田の喫茶店で、懇意にしていた神戸学院大学教授(当時)で社会学者の神原文子かんはらふみこさんから発せられた問いだった。この言葉が、私の認識を根底から変えたと言っても過言ではない。そして、ここから本書は生まれたのだ。

女性の貧困は仕組まれたものだった。それも、男女雇用機会均等法ができ男女平等が実現したと思った年——一九八五年に、用意周到に制度が組み込まれていった。この事実を知ったときの衝撃を、今でも忘れない。

はつきり思った。毎月、教育ローンの返済に追われる、今の生活苦には理由があったのだ。私が悪かったわけではないのだ。なのに、なぜ、こうも社会に対して負い目を抱いていたのだろうか。

「子どもの貧困なんて、本当にあるの？ 貧困なんて言うのなら、大学に行かせなきゃいいじゃない」

大学時代の友人から発せられた言葉だ。浪人中の次男にはしっかりと目標があった。小学生時代、発達障害のためなのか、文字がなかなか読めなかった次男が成長し、夢のためにも大学を志す。それを親の都合でやめさせるなんて、あまりにも残酷だ。

「黒川さん、それでいいの？ うちの年金もあるし、夫もいるし、生活、全然大丈夫なんだけど。息子が会社を辞めるって、認めていいの？」

一部上場企業に就職した長男が会社を辞め、半年間、アメリカへロングトレイルに出かけることを知ったママ友から、こんな言葉が返ってきた。認めるも何もない。それはひとえに長男の意思であり、彼の人生だ。

これが私たちシングルマザーへの世間の認識なのだと、苦汁を飲んで生きてきた。しか

し、私たちの苦しみには理由があったのだ。男性に扶養されない女性を想定していない日本という国の政策により、シングルマザー及びシングル女性の貧困は作られてきたのだ。

悔しかった。理不尽さに震えながら書き上げたのが、「アエラ」(二〇一八年二月一九日号、朝日新聞出版)に寄稿した記事だ。編集部がつけたタイトルは、「我が子が18歳を超え困窮するシングルマザー 『子に教育を』となぜ望めない」。

まさに！ なぜ、シングルマザーは子どもを大学まで進学させることに、これほどの困難を強いられているのか。その隠された仕組みを暴くのが、本書の一つの目的だ。

さらに、神原さんは恐ろしい未来予測を教えてください。

「これまで高齢のシングル女性は死別がほとんどでしたが、今後、離別が逆転するでしょう。そうになると、子育てを終えたシングルマザーの貧困が問題化してくると思います」

私たちの未来に、何が待っているのか。なぜ、そんな未来しか、私たちの前には存在しないのか。そのカラクリも本書できちんと見つめたい。

社会の子ども

本書で最も大事だと思うのは、取材に応じてくれた、六人のシングルマザーの生きざまだ。彼女たちが子どもを思い、どれだけ必死に生きているのかをありのまま見ていただくことで、当事者同士が繋がりがあっていくきっかけにもなって欲しいし、多くの方にその人生に寄り添って欲しいと切に願う。

韓国では、「ひとり親家庭」への理解教育があるという。ひとり親がどんなふう^に苦勞して子どもを育てているかを知ることによって、社会全体でひとり親家庭を支えていこうという氣運を、国を挙げて醸成している。

韓国の支援策については本書で触れるが、実態を知れば知るほど、韓国のように日本が變わってくればと何度、痛切に思ったことだろう。誰もがひとり親家庭を認め、支えていこうと思える社会に舵^{かじ}を切る一助に、本書がなればという願ひもある。

声を大にして言いたいのは、これは決して、シングルマザーだけの問題ではないということだ。私たちが感じる、生きづらさの理由の一つに、女性が分断されていることがある

のではないだろうか。男性に比べて、これほどまでに不利な状況に置かれている日本の女性たちが、立場を超えて繋がりがあえれば、何かが変わるのではないか。

男性に対しても、同じだ。さまざまな家庭や生き方を認めあう多様性のある社会こそ、生きやすい状況を作るのだと思う。社会を構成するメンバーとして、シングルマザーがどんな日々をどんな思いで送っているのかに耳を傾けて欲しい。この国が女性を分断してまで作っている、「男性大黒柱」の家庭など、男性にとっても窮屈なものではないか。

お互い、多様性を認めて、もっとラクに生きやすい社会にしたい。子どもは（社会の子ども）（フランスの哲学。後述する）として、みんなで育てていく社会にしたい。行き着く思いは誰もが一緒だと願い、これから書き始めていこうと思う。